

「第9回市民参加懇談会」の概要
～核燃料サイクル政策に関してご意見を述べていただく場として～

1. 日時:平成16年10月29日(金) 13:30～17:00
2. 場所:IMPホール 大阪市中央区城見1-3-7松下IMPビル
3. 出席者:
 - 市民参加懇談会コアメンバー
 - 碧海委員、井上委員、小川委員、東嶋委員、中村委員(司会・進行)、
吉岡委員
 - 原子力委員会
 - 木元原子力委員(座長)
 - (オブザーバー)近藤委員長、齋藤委員長代理、町委員、前田委員
 - ご発言者(7名)
 - 飯田秀男(大阪府)、池島英紀子(大阪府)、石黒順二(福井県)、
小林萬智子(大阪府)、佐藤大介(大阪府)、中尾佳世子(大阪府)、
中嶋哲演(福井県)

(参加者)約180名
(プレス)10社

4. 概要

飯田秀男(大阪府)

- ・ 各シナリオともまだ不確実性を多分にもっており、その条件の下での試算と認識している。シナリオから何かを選ぶとなるとシナリオ4だと思う。
- ・ エネルギー計画を将来にわたってどうするのかという視点に立った議論が必要。分かりやすい資料が重要だと思う。
- ・ 行政において原子力を推進する部門と管理・規制する部門とを分けることが必要である。
- ・ 美浜の事故に関連し、老朽化している原子力発電所の管理手法を見直すことが求められている。
- ・ 総合的なエネルギー政策では原子力発電に固執する必要はない。再生可能エネルギー、自然エネルギーについて、技術開発の進展、国民の支持が集まっていくようになれば、開発・補助されてしかるべき。それにより供給も上がるし、国民にエネルギー問題を身近に考えることが広まる。

- ・ 私たちはエネルギーの使い方についてもきちっと考えなければいけないし、省エネという立場で何ができるのかも議論しなければならない。
- ・ 自由化議論のことも含めて議論されないといけない。

池島芙紀子(大阪府)

- ・ 世界の情勢から見ても、日本が地震の活動期に入っている状況を見ても、これ以上の原子力依存は止めるべき。環境面、経済面でリスクの低い分散型エネルギーに政策変更をすべき時。ただし、今すぐ全てというのは当然無理な話で、それをどうしたらいいかというのは議論が必要である。
- ・ 核燃料サイクル政策の議論においてももんじゅについての議論がない。高速増殖炉については、毎回の長計で計画が延び延びになり、現行長計ではもんじゅ後の実用化の目処が消えてしまった。核燃料サイクル政策は、もんじゅを動かし、その次の実用化を実現させて初めて意味がある。その後の実用化の目処がないものは核燃料サイクル政策と呼べない。もんじゅの議論の際には、もう一度関西で場をもって欲しい。
- ・ 日本原子力研究所と核燃料サイクル開発機構との統合でもんじゅをどうするのか、単なる燃焼炉なのか、増殖させるのか。運転再開させれば必ずまた事故を起こす。事故を起こしたときに一体責任は誰がとるのか。
- ・ 50年先なら役立つかもしれないので血税をそそぎ込んでもんじゅの研究を続けたいと説明しても納得できない。即刻やめて、バイオマスといった再生可能エネルギーにもっと力を入れるべき。

石黒順二(福井県)

- ・ プルサーマルは重要な政策の一つということで、地元としても了承をした。直接処分となると青森県の再処理施設、プルサーマル、中間貯蔵もいらない。研究してきたものとの比較論として、直接処分地を受け入れる自治体があるのか。また、発電所の使用済燃料貯蔵プールが満杯になり燃料交換ができなくなると発電所を止めざるを得ない状況になるのではないか。私たちの地域は原子力が地場産業とまでいわれており、地元の非常に大きな雇用、自治体の財政、地域経済が大変深刻な状況を迎える。今日まで国の政策に協力し、あげくはそういう状況になれば、国の原子力政策に大変大きな不信感を持ち、責任を求めることとなる。
- ・ 長期的なエネルギーの安定供給は国の安全保障。量、安定性、コスト、

環境、これを全て満たす代替エネルギーが明確にならない限り、ある程度は原子力でやって行かざるを得ない。長計に明確に核燃料サイクル路線の確立を位置づけ、原発立地地域に安心を与えて欲しい。

- ・ 美浜の事故に関しては、二度と大惨事が起きないように、安全、管理体制の確立を強く望みたい。

小林萬智子(大阪府)

- ・ 阪神淡路大震災で電気を含めた全てのライフラインが止まり、その時に電気の有り難みを感じた。私たちの生活は電力に依存しきって成り立っていると言わざるを得ない。右肩上がりに電力需要が増えているらしいが、化石燃料は無尽蔵でなく限りがある。また、国際要因で石油は安定した価格で手に入らない。日本は自前のエネルギーを持たないので国際情勢に振り回されていると思う。日本も自前のエネルギー源を持つ必要がある。エネルギー自給率を高めるため、比較的経済効率がよい、安定的な電源であるとされる核燃料サイクルは避けて通れないものだと思う。
- ・ 日本の人々は、原爆から発していると思うが、核に対するアレルギー反応が非常に強いと思う。正しい知識を一般の方々にも分かるように、広報活動をもう少し頑張っていたきたい。
- ・ 核燃料サイクルにより、ウランを使用する年数、猶予が少し伸びると思う。その間に、次世代のクリーンなエネルギー、安定して低価格で供給できるエネルギーを、ぜひ研究機関で開発し、確立していただきたいと思う。
- ・ 電力は、トップと現場との間の意思疎通をもっと風通し良くして欲しい。

佐藤大介(大阪府)

- ・ プルトニウムはエネルギーとして有効に利用できないということが世界的にはっきりしてきた現在、再処理工場をなぜ運転するのか。本音は発電所の使用済燃料を青森に持っていきたいということだと思う。北朝鮮の核開発をめぐる協議にもプルトニウム利用は悪影響があるのではないか。協議が進展し、北朝鮮の核開発が凍結されるまで、再処理工場の運転とそれにつながる試験は行わないで欲しい。
- ・ 1993年から毎年開催されてきたノーニュークス・アジアフォーラムに集まったアジア10カ国の反核、反原発の人達から、日本のプルトニウム利用は核開発につながるのではと批判されてきた。外国から日本はどう見

られているのか、果たして信用されているのか、ぜひ考えて欲しい。

- ・ 日本のプルトニウム利用政策が、対外的にどのような影響をもたらすか、様々なケースを想定した議論を行うよう強く要望する。
- ・ 今、世界的にはエネルギーの主流は非常に熱効率がいい天然ガスになってきている。今後は燃料電池とか、省エネ、あるいは様々の自然エネルギーの開発といったことが重要になっていくと思う。

中尾佳世子(大阪府)、

- ・ 美浜の事故は、管理されるべきところが管理されずに事故が起きた。一方、この事故は、原子力発電の技術とは異なる次元のことであり、美浜の中間貯蔵や、高浜のプルサーマルなど原子力関連のプロジェクトが白紙状態になったのは釈然としない。
- ・ 原子力に関わる事業者や国は、いわゆる人々のリスクに対する感じ方をもっと研究、分析し、日常の広報に生かせるよう努力が必要ではないか。
- ・ 資源の少ない我が国にとって、安定したエネルギー供給が必要。現時点における最善の選択肢として、その代替となる新しい技術が確立するまで、原子力を選択するのは当然の帰結だと思う。
- ・ 化石燃料は無尽蔵ではない。リサイクルの考え方は日常的なものとして浸透している。大変、扱いが難しく、取り扱いを間違えれば、放射線を出す物質であることは踏まえているが、なおそのことを考えても、使用済燃料のリサイクルのもつ意味は大きいと考える。
- ・ 私たち自身の現在の生活、将来の生活、さらに子や孫のもっと先のことにつながる将来をどういう環境にするかという選択に迫られている。

中島哲演(福井県)

- ・ 老朽原子力発電所の安全、管理が喫緊の問題。老朽原子力発電所の運転が強行されていくなれば、老朽化なので1次系が特に汚染していき、中で働く労働者被ばくも増える。また、使用済燃料等を増加累積させ、大事故の危険性、膨大な被ばく、超高コストをも招来しかねない。大地震、テロなど複合した大災害も危惧される。一方、原子力発電所を停止すれば、それらがなくなる。政策変更コストは、損失補填にとどまらず、あらたな方向転換への準備・支度の役割をも果たす。
- ・ 原子力発電所の必要神話の実態を究明する必要がある。省エネ、節電

の更なる具体化を、都市部の方も含めて真剣に考えて欲しい。

- ・ 使用済み核燃料の発生量そのものの抑制、一日も早く脱原発へ向かう仮想シナリオも検討して欲しい
- ・ 大量消費地の大阪市、京都市、神戸市、地元では福井、小浜で、市民懇に限らず、策定会議の委員がきて、地元住民の声を聞いて欲しい。原発を拒否し続けてきた地元住民の声も聞いて欲しい。

会場参加者

- ・ 高レベル放射性廃棄物の処分場が決まらない状況では、最良の選択は再処理せずにこれ以上ゴミの量を増やさないことだと思う。高速増殖炉については、市民も交えてきちんとした討論がなされるべきだと考える。
- ・ エネルギーの将来を考えると核燃料サイクルが必要と考える。安全の言葉を現場からボトムアップであげていくと同時に、政策というものはトップダウンでしっかりとしたものでなくてはならない。
- ・ 再処理はどういうメリットがあるのか明確にして欲しい。
- ・ 市民参加懇談会での意見を新計画策定の審議に反映して欲しい。核燃料サイクル政策は、国民にとって非常に重要な問題であり、パブリックコメントを経ずして最終的な委員会決定とならないことを確認したい。
- ・ 地元の人々は普通に生活している。全国の国民の人たちに、もう少し原子力の状況について深く理解していただきたい。電力の生産地と消費地という格差がまだまだあると感じる。
- ・ 貧弱な日本のエネルギー問題を解決するため高速増殖炉サイクルが必要。現行長計では高速増殖炉実用化に向けた具体的な年数がなくなったが、復活させて、もんじゅの運転再開、実用化の道をつけて欲しい。
- ・ 美浜の事故は、二次系の破断であっても一次系に影響する。火電と同一視して考えることは間違いだと思う。また、労働者の安全という立場で考えて欲しい。世界的に高速増殖炉の時代は終わったといわれている。日本だけが固執していくのはおかしいと思う。方向転換を大胆にやるべき。
- ・ 高速増殖炉の開発は、米国、中国等で行われている。競争である。日本が、これからエネルギーを将来まで安定的に使っていくためには、世界に先駆けて高速増殖炉の技術を手に入れることは極めて重要だと思う。
- ・ 現時点で、今の快適な暮らしを可能にしている大きな力である原子力に、国民はもう少し多くの関心を寄せなければならない。

- ・ 意見を集めた後に、そこから出た結論の一つ、何か市民ができることを提示して欲しい。また、核燃料サイクルは100年経たないと処理はできないと思う。100年経って処理してくれるのは次世代の子どもたちなので、子どもたちが判断できるよう原子力の教育をきちんとするべきである。
- ・ 核廃棄物は何万年ともつものであり、子供に処分してくれと残すことはできない。燃料電池や太陽電池で日本は世界でトップを走っており、これが世界のエネルギー危機を解決する一番の近道だと思う。
- ・ 原子力発電が始まってもう30年以上たっているが、いまだに使用済燃料の処分の仕方が解決されていない。国民の合意が得られていない。
- ・ 廃炉は大きな問題であり、それを差し置いてプルサーマルや再処理を議論するのは順序が違うのではないかという気がする。また、回収ウランは使うのか、その取り扱いはどうなるのか。
- ・ 規制を強化したり、検査を強化したりすることではなく、むしろ大幅に緩和して、現場の技術者や設計者が本来必要な感性を高めて仕事ができるような環境づくりをお願いしたいと思う。